



第94号

令和3年5月15日発行

石坂洋次郎文学記念館

〒013-0005

秋田県横手市幸町  
2-10

TEL&FAX

0182(33)5052

●開催報告

令和2年度

ミニ企画展「裕次郎と洋次郎」

令和3年1月7日(木)～3月31日(水)

石坂洋次郎にゆかりの深い俳優の一人である石原裕次郎をテーマにしたミニ企画展を開催しました。



展示風景

本展では、洋次郎原作、裕次郎出演の日活映画「乳母車」、「陽のあたる坂道」、「若い川の流れ」、「あじさいの歌」、「あいつと私」、「若い人」6作の映画資料や図書を中心に展示。29点の資料を通して、今ではあまり知られていない二人の関係性を改めて紹介しました。

来館者からは「裕ちゃんのファンだが、洋次郎の作品にこんなに出ているとは知らなかった」、「若いころの裕次郎が見られて嬉しい」、「昔、遠い映画館まで歩いて観に行ったのを思い出した。また観てみたい」といった声が聞かれました。裕次郎出演作品の他にも、今年の1月に解散した石原プロモーションの元所属俳優・渡哲也、館ひろし出演の原作映画ポスターも合わせて展示しました。こちらも興味深げにご覧になる方が多かったです。

◇お知らせ

◆休館日

今年度の休館日は、次の通りです。

○ 11月30日

休館日なし(※臨時休館日を除く)

○ 12月1日～令和4年3月31日

毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)

祝日の翌日、年末年始

◆ご来館の際のお願い

新型コロナウイルス感染防止対策のため、以下の点についてご協力をお願いします。

○手洗い、手指消毒、マスク着用の徹底  
マスクの着用が難しい場合は、咳エチケットにご協力ください。

○入館者名簿への記入

ご来館の方全員の「氏名、住所、連絡先」の記入をお願いしています。

○「三密」を避ける

・見学の際は、人との間に適切な距離を保ってください。  
・三密を避けるため、講座室を閉鎖しております。映像「ふるさと紀行」の上映は行っていません。

今から45年前の1976年（昭和51）5月15日、横手公園内に建立された石坂洋次郎文学碑の除幕式が行われました。除幕式には洋次郎も参列し、式の後には横手城南高校（旧・横手高等女学校）で「横手に十三年」と題した講演も行っています。

## 私の文学碑

五月の十五日、秋田県横手市の公園に私の文学碑が建てられ、その除幕式に私の一族、知人、友人が東京、関西から参列し、地元の知人や男女の昔の教え子達も多数列席して下さった。感動この上もない出来事だった。

私の文学碑は、昭和四十九年、郷里である青森県弘前市のりんご公園にも建てられており、横手の文学碑は二度目のものであるが、それだけいっそう落ちついた喜びが感じられたようだ。

私が横手市（もとは横手町）に住みついていたのは、大学生のころに結婚して、卒業するころには子供も生れており、家族の暮しを支えていくためには、好きな小説の勉強一途にうちこむ気ままな生活に、地元である弘前市の高等女学校（旧制）に就職したからである。その翌年、

郷里をはなれて、横手の高等女学校に三年間ほど、ついで横手中学校に転職して、前後十三年間ほど横手に住みついた。そして、これは結果論であるが、若い私が小説ばかり読んだり書いたりせず、長いこと、教師という社会の実務についたことは、私の人生勉強にもなり、同時に小説を書く上でも、着実な支えになってくれたような気がする。

町の中を水のきれいな旭川が流れ、晴れた日には遠くに鳥海山を見はらせる横手は、空気はきれいだし、人情は素朴だし、住みよい町だった。殊に私が十年ほど通勤した旧制の中学校は、身体のひ弱い私が歩いて一時間ぐらいかかる距離にあり、雨の日も風の日も雪の日も、中学生達に夜蚊というあだ名をつけられた私が、町を出ると人家が一軒もないその田舎道を往復したのであるから、蚊のようになやせ細ってはいても、それなりの生存力が蓄えられたのであろう。



洋次郎の教え子達が撮影したもの  
上は文学碑前にて。下は講演の様子

かわいいう少女が序幕の紐をひく。ガツシリした男鹿石の台石の上に、幅三メートル、高さ二メートル（台石とも）の福島産の白ミカゲが置かれ、それには碑文が刻まれたインド産の黒ミカゲがはめ込まれてある。

「小さな完成よりも あなたの孕んでい  
る未完成の方が はるかに大きいもので  
あることを忘れてはならないと思う」  
（「若い人」と、私の筆跡で刻まれてあ  
る。私は生れつき字が下手な方で、中学  
三年生の習字の時間に、地元で書家と  
して著名な先生が朱筆をもって教室をま  
わって歩き、私の所に来るとピタッと立  
ち止まって習字をのぞき、教室中に聞こ  
える程度のひとり言をつぶやいたものだ。  
「おい、お前の習字の下手さかげんは天  
才的なものだ。いくら勉強したからって  
直るものではない。私はお前の習字には  
朱筆を加えないことにする。好きなよう  
に書くがいい。ただし、最低の及第点は  
やるからな」

その通り、私の悪筆は生れつきのも  
で、どうしようもなかった。私が碑文を  
「若い人」から選んだのは、それが横手  
時代に書かれた作品であり、広く読まれ  
ていたからである。しかし、書の問題だ  
が、だれの影響も受けずに、自分だけの  
日陰の道を歩きつづけたおかげで、自分  
では納得のできる字が辛うじて書けるよ  
うになった。弘前並びに今度の横手の文  
学碑の場合もわかりである。（後略）